

鹿島市総合教育戦略会議（第19回） 議事録（概要版）

1 開催日時 平成30年7月10日（火）15時00分から17時03分まで

2 開催場所 鹿島市役所 3階 庁議室

3 出席者等

- ・法定構成員 樋口市長、江島教育委員会教育長、田中教育委員会委員、岡田教育委員会委員、木原教育委員会委員、田代教育委員会委員
- ・特別招集 中原鹿島小学校校長、熊本能古見小学校校長、北原古枝小学校教頭、大川内浜小学校校長、井上北鹿島小学校校長、杉本七浦小学校校長、上野明倫小学校校長、桑原西部中学校校長、野崎東部中学校校長
- ・市長部局 藤田副市長、有森総務部長、有森市民部長、染川福祉課長、田崎企画財政課長、中島総務課長、事務局（総務課職員 堀、吉田）
- ・教育委員会部局 寺山教育次長兼教育総務課長、岡指導主事、高本課長補佐
- ・傍聴者 なし

4 確認事項及び協議事項

(1) 第18回鹿島市総合教育戦略会議（H29.11.9）の議事録について

- ・議事録素案の内容を確認

(2) 教職員の多忙化の解消に向けた具体的な施策について

5 出席者の発言のとおり

5 出席者の発言

(1) 概要

司会：有森総務部長

1 開会（有森総務部長）

2 市長あいさつ

樋口市長 従来と違い、教育委員会いわば学校現場と市長部局とができるだけ風通しを良くしたほうが良いということで、制度改正が行われました。概して言われておりましたのは、学校現場がどうも外から見たら分かりにくい、ということがあって、その辺のことを議論することが一つ。それから、学校の現場がより子ども達のために動けるように、ということでどういう組織、あるいは問題があるのかないのか、どうやって解決していけばいいのかということが、この会議の目的です。これまで、ずっと色んなテーマを定めながら、総合教育会議をやってきましたし、その中でとりあげてきたものもいくつかございます。現在残っていて、一番集中的にやっていますのは先生方が忙しいということ、自分達が忙しいと思っ

ていても、それを周囲が理解してなければなんのサポートもないということが一点。それから、もう一つ、先生方に対して、P T Aの皆さんがどう感じておられるか、本当に伝わっているのだろうか。ということです。どうも、先生方との距離が想像以上に遠いのではないか。親に対して、子どもはなかなか先生のことを正確に家庭で言ってくれませんし、なかなか真実が伝わらないということのようです。私はこの会議に臨むに当たって、全ての小学校、全ての中学校でP T Aの皆さんと、特に先生を入れなくて意見交換をやりました。そういう議論が今日頂戴できればなと思っております。ぜひ、しっかり子ども達のための議論ができればと思っておりますのでよろしくお願いをいたします。冒頭の挨拶にします。よろしくお願いをいたします。

(自己紹介)

教育委員、小中学校校長、市職員の順に自己紹介

3 確認事項

第18回鹿島市総合教育戦略会議（H29.11.9）の議事録について
議事録（素案）の内容確認

4 協議事項

(中島総務課長 資料P2経過まとめ、P4各小・中学校P T Aと市長との懇談会、
P6スケジュール（案）、P7依頼業務事前チェックシート、P8国・県・市の動きについて説明)

まず2ページから3ページは、これまでの鹿島市総合戦略会議の結果をまとめております。平成27年の7月1日の新しい教育制度の下での法の施行から始まり、28年3月に教育大綱を策定いたしております。29年は4回会議を開催し、主に教職員の多忙化の解消に向けた具体的な施策について検討を重ねてきました。第18回の会議においては、一定の方向性を見出したところでございます。次に4ページから市内の小中学校のP T Aの方と懇談をしたときのご意見をまとめております。子どもに望むこと、学力、学校・先生、学校以外の過ごし方、家庭環境・家庭教育、I C T・ふるさと教育と6つのカテゴリーに分けて整理をいたしております。次に6ページには教職員の多忙化の解消のための具体的な施策を6つあげております。1つ目が支援員の増員で、市で特別支援員、教育支援員などの増員をできないだろうか。というご意見があり、これに対して、市の実施計画、予算要求、議会議決など一連の手続を経て、30年度には3名の増員がはかられ

ております。それから施策2の職業体験産学公連携授業については、学校の負担となっていた職場体験の事業所の開拓を商工会議所に協力いただき、連携して進めるようスタートしています。それから施策3、学校徴収金の口座振替事業については、これまで、学校の集金事務については、現金を扱い、教員の多忙化の一因となっているということでありましたので、今回既に学校事務職員の会議において徴収金事務の改善とシステム導入の検討が進んでおります。順調に進めば31年度後半にはシステム導入というところがございます。それから施策4、国・県照会等への対応について、照会件数が多いことが多忙化の一つの要因ということで、教育長会議などで実現可能なことを集中的に取り上げるという方向性が出ました。例えば、佐賀県は（他県ではしない）全国学力調査の際の答案用紙全てをコピーし、独自に採点しなければならない。これが先生方に多大な負担があるということでした。これについては、7月17日の県西部地区の教育会議において提案していただいております。施策5、市照会の対応については、学校への依頼業務のときは事前チェックシートを付けて教育委員会を通じて照会するようにしました。既に20件ぐらい提出され、必要性を確認しており、部数の仕分け等で効果が出ているということです。それから、施策6の部活動指導員についてでございます。6月の補正予算により部活動指導員2名の予算を確保し、東部中学校のソフトボール部とソフトテニス部にそれぞれ1名の指導員を配置するようになっております。8ページは国・県・市の動きを掲載しております。以上がこれまでの経過です。

（校長先生からのご意見）

○H30支援員増員について

- ・3名増員していただいている現場は非常に助かっている。児童生徒数の減少により現場の職員定数は少なくなっている。その中で、家庭環境も複雑、多様化しており、発達障がい児も増加傾向。やはり、マンパワーが必要。今年並みの12人を最低ラインとして継続をお願いしたい。

○学校徴収金口座振替化事業について

- ・中学校では数千万円の現金を取り扱うという非常に厳しい状況。口座振替のシステムの導入に向けて準備をしていただいていることはありがたい。

○発達障がい児、情緒障がい等について

- ・特別支援関係、発達障がい関係で支援が必要な子ども達が相変わらず増えている。

児童生徒数が減っている中で、そのような子ども達は増えているので、その率は非常に高くなっている。市内校長会で実際に調査を実施した。発達障がいや発達障がいの要因を含む、生徒指導上の問題行動も含めて、対象となる支援が必要な子どもが、小学校では昨年度よりも50名増えている。支援が必要な子どもの内、実際に診断を受けているのは、小学校で35%、中学校では51%。では、実際に診断を受けているから支援学級で学べるかということ、そうではなくて、その子ども達の中でも、更に保護者の承諾が必要であり、市の支援員会で適正の条件をクリアしないと支援学級で学べない状況。つまり、通常学級の中にも発達障がいに近い子はかなり居るということ。その中で授業を進めていかなければならない。支援員のサポートはこれまで以上に必要。厳しい学校には更に増員をお願いしたい。

- ・特別支援学級というのが各学校にあるが、これとは別に、通級指導学級というのがあり、西部中学校の方にはあって、東部中学校にはない。同じ鹿島市内なのに。そこには通級指導を専門的に勉強した職員が配置される。小学校の頃は通級指導に通っていたのだが、東部中学校にはないので、西部中学校に送り迎えをしなければいけない。だったらもう断念するというので、諦めているという生徒、保護者がたくさんいる。通級指導の教室を東部中にも増やしていただきたい。
- ・情緒障がいの子ども達は、集団の中で適応がなかなかうまくいかなくて、週1回のまなびの教室にくることで、クールダウンができています。情緒が安定することで、教室に戻っていられています。通級指導教室は効果があると実感しています。
- ・情緒ではなく、身体的な課題を抱えている子がいる。例えば、出血をしたら、血が止まらなくなるとか、低筋力でいつ転んで怪我をするかわからないという子ども。それに誰があたるかという課題がある。今、生活支援員さんをプラス1名つけてもらっているが、1名しかいないものだから、その2名については誰がどうあたるのかと。発達障がいだけじゃなくて、身体的問題のある子ども達のこととも考えていかないといけない。
- ・発達障がいと認知されるようになったことで数字が大きく違ってきているのでは。昔を思い返してみれば、30数年前のあの子どももそうだったのかなと思えば、彼らが今、中学生小学生であるならば、発達障がいとされるのだろう。
- ・アスペルガーの子がいて、その子のお母さんもそうで、多分、遺伝もあるのではないかな。そういった子を早期に、小学校に入る前の段階から気づきがあって、ソーシャルスキルなどのトレーニングをある程度専門的にやっていると、そういう障がいというのがある程度抑えられて、克服できるのではないかなと思う。就学前の健診などで、専門の方が診られて、この子は、こういう特徴があるから、こういう訓練をすべきですよ、というようなことを専門的な立場から言っていると、だいぶ

保護者も素直に聞けるのかなと思う。できるだけ早期に発見できるシステムをつくれれば少しは解消できるかなと思う。

- ・子ども向けの相談だけでなく、先生方が悩んでおられるので、先生方が相談できるシステムがあれば助かる。不思議なことに、発達障がいとか騒いでいる子ども達も、ある時期、ある先生にもたせるとある程度収まるということがある。その先生から外れたときにまた復活するというのも。私たち自身が、発達障がいについての学習を、先生になって初めて、子ども達に会ってからしかしていないというのが大きなポイントかなと思う。だから、私たち自身が成長できるような先生向けの対策というのもあったらいいと思う。
- ・情緒障がいの子どもで、交流学級で一緒に授業ができない子どもについては、その教科ごとにその教科の免許をもっている教員が学力保障をしなければならない。知的障がいの子どもであれば、制度上はどんな免許をもっていようが教員であれば教えられるが、情緒障がいの子は全ての教科が、国語は国語、英語は英語の教員が教えないといけないようになっている。それに対応するというのは、非常に大変。

○学力について

- ・（PTA 懇談会では「学力を上げて」という保護者の声はほぼ無かったが、先生方はどう考えているのか・・・）小学校と中学校とでも違うような気がする。小学校は私立とか、望めば受験等もあるが、基本的に公立の中学校にそのまま進める。しかし、中学校には高校受験というハードルがある。学力が伴わなければ志望校に行けない。小学校とは違って、中学生になっても、ただ元気に友達と仲良くしてくれてさえいればいい、という親ばかりではないのではないか。
- ・ある程度成績が高い子どもの親御さんの意見ではないだろうか。学力のとらえ方は様々で、しつけの面とか礼儀の面とか。部活動の指導をしても、よくそういう論議になる。保護者の中には、高いレベルで九州大会とかに行かせて欲しいという保護者もおられるが、それは大概レギュラー組。試合にあまり出られない子の親は、そこまでしなくていいのに、という感じ。それに似ているなと思う。
- ・（先生方は、どの学力レベルを対象に授業を展開されているのか・・・）対象は、全部伸ばさないといけない。算数の授業であれば、分かっている子は分かっているけど、それを説明できない。それを説明できるようにしようとか、友達に教えることができるようにしようとか、一定の基準があって、そこにクリアを求めている子どももいれば、それをもっと分かりやすく説明しようという風な授業を仕組むということを目指している。体育の学習では、25mを目指している子どももいれば、1kmを目指している子どもがいたって全然おかしくない。だから、授業の仕組み

としては、それぞれの子ども達に合わせた学習をどうやってしていくかということ。理想は、それぞれを伸ばしていきたい。どこに基準を置くじゃなくて、その子どもをそれぞれ伸ばしていきたいというのが私たちの理想だと思う。

- 学力の個人差が非常に大きいので、もう一人の先生をつけてTT指導を行うとか、二つに分けてそれぞれ同一レベルにして授業を少人数でやるとか、そういう様々な工夫をしなければいけない状況。
- 平均値を意識している教員はほぼいない。平均値で授業を仕組んでというのではない。学力の平均値で比べたりするが、現場の教員が授業で意識することはない。とにかく一人ひとりの現状から少しでも上、ということを意識して授業を組んでいる。
- 「基礎基本」はどの子どもにも必ず身につけさせたい。これは教師の使命。全ての先生方が思っている。いくら注意をしても鉛筆すら握らないという子どももいる。その子に鉛筆を握らせる努力をしながら、片や一方では、今日この時間は、これだけの内容を全部の子に理解させなければいけない、と思いながら教えている。学力をどの子にも付けさせるという意味においても、フォロワーが一人でも欲しいというのが、現場の切なる願い。
- (学力=受験のため?・・・) 中学校で、君は何点しかとれないから、ここの高校を受験しなければいけないと言うことは全くない。まず本人が、どこに行きたいのかという話をしながら、ここの高校に行きたいんだったら、今の状況では点数が足りないからもうちょっと頑張らないといけないよ、というかたちで入試に向けてのモチベーションということで話をすることはあるが、受験イコール学力というのは全くなくて、普段の指導とは違う次元であると思う。
- 子ども達は、自分で仕事をしてこの世の中を切り拓いていかなければいけない。受験の学力とは別に、頭の良さとかキレを養ってもらいたい。目の前にある課題を克服できるように、普段の勉強をしながら、頭の良さとかキレとかをつくっていく。子ども達には機会があるごとに、何で勉強をしないといけないか、ということのを常に問うていかなければならない。

○先生の頑張りについて

- 鹿島市の総合教育戦略会議というのが開かれているということがすごく嬉しかった。それだけ子どものことを大切に思ってくださっているんだなと思って。市長さんを中心にたくさんの方が参加されて、私達の意見を聴いてもらって、鹿島の子どもって幸せだなと、非常にありがたいなと思った。私がいつも心にかけているのは、「教育は人なり」という言葉。やっぱり先生が健康じゃなくてはいけないし、先生が幸せじゃなくちゃいけない。先生になってよかったと思ってもらえなくてはいけない

といつも思っている。

- ・学校の先生達はものすごく忙しい。授業にずっと入っている。水泳をして着替えて、髪は半分濡れたような状態で、次の授業をしてという感じで、トイレにも行けてないんじゃないかなと心配するぐらいに毎日バタバタ仕事をされている。そういう忙しさというのを例えば鹿島市報などで、みなさん知っていますか。先生方はとても忙しいんですよ、とアピールをしてくださったら、みんなが先生達にやさしくなってくれるんじゃないか思ったりする。
- ・私達（先生側）から忙しいんですよって言いにくい。でも他の方がこんなに学校っていうのが忙しいというのが分かったというのを発信してくださって、そしたら先生達のためにできることはないだろうかとか、迷惑をかけないようにとか、その辺の発信を市報とかですていただいたらありがたい。
- ・中学校は、部活動も大変。本当に時間外勤務を正確に計算したら、軽く100時間を越える。土曜も日曜も頑張って、子どもや親が一生懸命になって、先生お願いしますと言われれば、本当に前向きに取り組む先生が多い。そういう先生ほど休みもなくやってもらっているというのが現実。今は、保護者の方々はその姿が当たり前みたいなかたちで思っている方が多いのだが、本当はそうじゃない。そこを分かっていたくことができればいいなと思うことが多い。それはやっぱり学校現場からは言えないですね。私達は、本当はそうじゃないと言ったら、何か責任逃れのように受けとられるような感じがしますし。何かいい方法があればと思いますが。
- ・昔は、教科書とチョーク一本あれば、自分のしゃべりでやれていたのが、それではもう子ども達が付いてこなくなってきたので、電子黒板を使ったり、写真、映像を入れたり、ワークシートをさせたり、活動や話し合いを入れたり、とにかく講義形式ではとても無理なんです。そのために準備をものすごくされています。平日20時ぐらいまで残っていますし、忙しいときは土日2日間とも終日出てきている職員もいる。そのくらいしないと自分が納得できないし、子ども達に申し訳ないという気概でおられる。そういう先生達が疲弊してしまわないように気をつけたいと思っている。

○教師という職業について

- ・（教員採用試験の倍率低下。質の面での心配は・・・）新聞の僕の夢私の夢ですが、昔は先生になりたいという子がものすごく多かった時代があった。今は、先生になりたいというのは大分減った。教員試験の受験率も減っているし、今、なんとか教職員の多忙化に歯止めをかけないといけない。昔も昔なりに忙しかったが、卒業さ

せた後でも教え子がどう育っていくだろうという、本当に魅力ある職業が教師だった。今、多忙化に歯止めをきかせないと本当に良い人材が教職員になるということが減ってくる。人材をなんとか確保するためには多忙化に何とか歯止めをきかせないと。市長さん達がこの会を持ってくださっていることもありがたいし、是非続けていきながら、一つでも解決策が鹿島市で見つけれたらいいなと思う。

○学力向上サポーター事業（H29～）について

- ・参加している児童が非常にまじめに取り組んでいて、満足して帰っている状況で、少しずつ自信もつけてきており、非常に感謝している。
- ・指導者次第というところもある。一般に募集した先生で、全然言う事を聞かないということもあった。子ども達の状況と、指導者の問題が大きな課題としてある。形としては学習をするかたちになっていると思う。
- ・非常にありがたい。指導者についても校区内に退職校長がいらっしゃって、活用させていただいてしっかりしていただいている。
- ・かつて勤務していただいていた先生達が指導をしていただいている、30人以上がお世話になっている。褒めてくださるのでますます子ども達は頑張っている。

○次回開催日

- ・9月議会後、10月以降で調整する。 (17:03)